

(八月九日 講話メモ)

昭和大史の一端

宝田正久

大東亞戦争下の青年期を送った私にとって、忘れられないもので、
新しい日本の支那事業とは国の理想である」といふ事實は目覚め
させられた事であり、その過程を経てはじめていた先輩や諸友との
得難い交際であった。 去征と敗戦とその後の復興をかへりみて
願はれることは、「歴史を由面より支持する力」の国民的相
続といふことである。

ハワイ海戦に江戸とかへらぬいこと、艦しぬぶおもひを君にささげむ、

(一先輩から吉田房雄へ昭一七)

倒れたる友を嘆かすいつの日かおもひをささげむと思ふは、

(寺尾博之氏、昭一八、23頁)

ほんゝみで祈りますことさうつしゝにまむかむを水は流るゝ

(百武礼之氏、昭一八、23頁)

ゆへ身にはひとほしむるゝことの人となすやあたたかきかな

(松吉正資氏、昭一八、21頁)

(明治天皇御詔)

をりになれ

國のためせしむるを御念ふかまふかぬ人の心をながめて (明治三九)

(清室朝)

オーストリアの廿日あまりのほどは有れむ、北むきのえんにま出て、

夕暮の日の光をながめ、一とをよむに、雁のなを聞くよめる

あまめつづがもよも非らく帰る雁やんむかたの夕ぐれの花を

(山田正久)

知念

月かたはなつとあまはくし所を先く秋の命を尊のうまふこと (昭一七)